
迷想 - メイソウ -

壬生一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷想 - メイソウ -

【Nコード】

N3335K

【作者名】

壬生一葉

【あらすじ】

必然の様な出逢いから恋に落ちる二人。それが本当の恋なのか。。。

プロローグ

「ねえこの後暇だったらお茶しようよ？」

「……。」

男は推理小説の謎解きの章で、その物語の中に入り込んでいた。女は辛抱強く、男の返事を待った。

男がハードカバーの裏表紙に手を置いた。

隣で、女性誌のページを行ったり来たりさせている女に目をやる。男の顔を見て「で？」と聞いた。

男が答えた。

「で、でって……?!」

「この後暇だったらお茶しようよって、今から13分前位に声掛けただけ。」

女も女性誌を閉じた。

「は？からかうの止めて下さいっ！」

男は立ち上がり右隣の席に置いていた学校指定の紺色のバッグを肩にかけ、

背凭れのマフラーを手にして女の後ろを通り過ぎようとした。

女の左手が素早く、男のブレザーの裾を捕える。

男がカクツと停止。

此処が何処であるかも忘れた男は声を大きくした。

「なっ何するんですかっ?!」

目の前の女と、その前にある大きな机。

そして周囲の多数の書籍棚。此処は図書館。

男は、他の利用者の迷惑になってしまった事を悔やみ、辺りを見回した。

自分の座っていた机の上の蛍光灯が灯っていて、他は夕焼けの暖色を帯びていた。

「???」

女が男の読んでいた本を背表紙を頼りに元の棚へと返却した。

「貴方、この人好きね？マニアックって言われない？」

女は、受付カウンターを照らす電気を消した。
手にしているのは、IDカードだった。

「れ・・・あれ？」

男がふと見上げた図書館の掛け時計は18時27分を指していた。
図書館の閉館時間は18時である。

近くのファミレスで女はアイスティーのグラスを空にした。

「あの・・・俺、すみません。」

「何時もの事じゃない。」

女は笑った。

男が閉館時間も忘れて本に夢中になっているのは、職員の間で有名だった。

「個人情報の問題もあって、本当はこんな事しちゃいけないんだけど、どうしても貴方と話してみたかったんだ。田口伊緒くん。」

伊緒は女にそう言われたからか、自分の名前を呼ばれたからなのか体中が熱くなり両膝に置いたそれぞれの手を力強く握り締めた。

「あたしは、此処の近くの大学4年の安藤董。その制服、一高のでしょう？あたしも実は一高出身。」

此処。今はバイトだけど春からは契約職員になるんだ。何度か対面した事あるんだけど、記憶に無い？」

一瞬遅れて、伊緒は頷く。

「・・・そうよね。伊緒くん、本しか興味無さそうだもん。」

「あの・・・話って・・・。」

伊緒は、董の考えてる事が全く解らず完璧な困惑の渦中に居た。

「ねえ、『WHO IS MURDER』は誰が犯人だと思った？」

「え？」

伊緒としては少しだけ、男女の質問が飛び出すのかと構えていた手前、話のベクトルが180度別で質問を聞き返してしまった。

「あたしは、”ハルヤマ”が妖しいと思ったんだけどね。」

「あ、・・・お。俺は”アヤノ”だと思った。」

「えー！！あたしの弟もそう言ってたっ！アヤノなのぉ？！又、読み直さなきゃ。」

聞けば、董も伊緒同様、推理作家の織戸悠おりど ゆうが好きで、図書館で織戸悠の本ばかりを完読している伊緒と推理談義を試みたかったという事だった。

伊緒にとっても董とその話題で盛り上げられる事にかなり興奮していた。

二人は携帯番号とアドレスの交換をして、その日は別れた。

プロローグ（後書き）

少ない話数の連載ですので、1話1話が長文になっています。
読みづらいかもしれませんが、申し訳ありませんが
暫しお付き合いくださいませ。

*** 壬生 ***

SIDE 董 - 感情 -

「ねえ新刊、何時入る？」

知り合つて2カ月が過ぎると、伊緒クンは敬語を止めた。

「あたし買ったら先、読む？」

「董さん読んでから貸して？」

閉館間際の図書館のカウンターを隔ててあたし達は話をしていた。

「明日はバイト？」

「うつん、明日は休み。」

「董さんちに行つていい？」

「もうすぐ期末じゃないの？遊んでて良いの？」

「董さんに英語教えてもらっ。」

屈託なく笑う伊緒は17歳。

この笑顔の為に、何でもしてあげたくなる気持ちは”母性”だろうか。

そんなつもりじゃなかったんだけどな・・・。

今となつては織戸悠が口実だったみたいな状況だな。

あたしはパソコンの電源を落とした。

利用者が居ない事を確認し、電気を消していく。

待っていたかのように、図書館の入り口付近の壁に寄り掛かっていた伊緒クンがあたしの手を引いた。

「キスしていい？」

「だから何でわざと聞くの？」

「董さんのそういう顔が見たいから。」

「じゃあ、しないで。駄目よ。」

伊緒クンの顔を見ずに、掴まれた手を振りほどく。

伊緒クンが何も言わないので、盗み見るようにちょっとだけ伊緒クンに顔を向けた。

少し長めの前髪が伊緒クンの表情を隠してしまっている。

「伊緒クン？」

近寄るあたしを、伊緒クンは引き寄せて腕の中に収めた。

「董さんとシタイ。良い？」

伊緒クンの囁くような声が左耳直ぐそこで届いた。

彼のおねだりを断った事はない。

寝息を立てている彼の前髪を左手で掬いながら、寝顔を見つめる。

5歳も年下の男の子とこんな関係になるつもりは無かった。

しかもたった3カ月で・・・。

普段、織戸悠の話をする様な友達は居ない。お互いがそうだった。だから織戸悠の本ばかり読んでいる彼に興味があったのは確かだった。

それは男だからとか高校生だからとか、そういう次元の話じゃなかった。

話して、本当に細部まで本を読みこんでいる事に関心した。

話していくうちに少しずつ惹かれていった。

反面、5歳も年下の子に？と問いかける。

そんな時だった。

伊緒くんが図書館からの帰り道の遊歩道で、突然、こう言った。

「董さんとキスしたいな。」

とてもそんな事を言うような男の子という感覚は無く、どちらかと言えば女の子には憶手そうだった。

返答に困っていると伊緒くんは、唇に触れるだけのキスをした。

視線がぶつかって彼は照れ笑いをしてて、それを見て”伊緒くんが好きだなあ” そう思ったのだ。

それからあつという間だった。

そこは17歳。女の身体に興味無い訳なく、初めてだと言う伊緒クんに、あたしは簡単にイカされてしまった。

逆上せるような恋だった。

SIDE 董 - 感情 - (後書き)

今更なからですが、大分前に投降した”陰”の短編というか詩的な3作品の解説を今、させて下さい(笑)

『罪深き思考』↓天が地に対して叫んでいます。

『DARK IN THE DARK』↓星目線のお話。アノヒトとは月です。

『深愛』↓僕の中にある”嫉妬”を描いています。

いかがだったでしょうか。

SIDE 伊緒 - 感情 -

寝ても覚めても。

って、こういう事を言うのかな。

董さんの事で頭がいっぱいだった。

「伊緒、1年来てるよ？」

名前を呼ばれて顔を上げると、2年の教室の入り口に女子の人影があつた。

「ああ図書委員の人だね、何？」

俺がその場で話を済まそうとすると、彼女は顔を赤らめて俯く。

「あの・・・向こうで話、しませんか。」

「え？良いけど。」

家政科室が2階の奥にあつて、人けが無い寂しい場所だった。

俺は寒さに肩を縮める。

「先輩、好きなんです。付き合ってくれませんか。」

「は?!」

思わず、そんな返事をしてしまった。

俺は、本を読むしか取り柄の無いような極普通の男子だよ。

「・・・何冗談？」

「冗談なんかじゃありませんっ。」

彼女の必死さに俺は思わず、たじろぐ。

「ご、ごめん・・・でも・・・いや、あの俺、好きな人が居るんだ。だからごめん。」

俯く彼女が今にも泣き出しそうな気配を醸し出した。

泣かれても・・・。

俺は初めての経験に戸惑う。

「じゃあせめて今日、一緒に帰って貰えませんか？それを思い出にします！」

どうするべきか考えあぐねて、暗くなった通学路を彼女と肩を並べて歩く事になった。

「先輩が本をととても大切にしている姿が素敵だなって思ったんです。彼女が俺に好意を持つキツカケを話してくれた。」

それは、董さんにも言われた一言だった。

「先輩が薦めてくれた本は全部、読んだんですよ？」

「そっか・・・。」

ただこうして歩いているだけで、彼女にとっては”思い出”になるんだろうな。

彼女の家の方に、図書館があった。

俺はそこが近づいてくる事で心がソワソワし始めた。

左腕の腕時計を確認する。

17時をちよつと過ぎた頃だった。

董さんが早番だったら、図書館から丁度出てくる時間かもしれない・・・。

杞憂に終われば良いのと思った事は、実際に目の前に存在した。

董さんが何時ものバッグを手にして、正面玄関から出てきたのだ。

「・・・。」

何かを発するために開きかけた口を彼女は

「こんにちわ。」

と言っ言葉に変換し、軽く頭を下げて董さんは俺の横を擦り抜けた。

「先輩？」

彼女の声がして、軽い眩暈の後の意識を取り戻す。
董さんの姿は何処にも見えなかった。

彼女を家の近くに送り、直ぐに携帯を取り出す。

何コール鳴らしても、董さんは応えてくれなかった。

S I D E 董 - カオス -

嫉妬。

嫉妬だね、この感情は。

同じ年嵩の、同じ制服を纏った女子高生。

伊緒クンと並ぶ姿が、初々しくて目を瞑ってしまった。

何回も震える携帯は、力を失ったようでベッドの上でただじっと固まっていた。

あたしが10歳の時、彼は5歳だった。

あたしが25歳になった時、彼はお酒が飲めるようになる。

その年の差は、どうやったて、どんな想いがあつたって縮まらないんだよね。

・・・この年の差があつたから、彼もあたしを求めたのかもしれない。

セックスをしたいとか？

面倒くさくなさそうだからとか？

あたしは両手で髪をわしゃわしゃと掻き毟る。

「ああーっ！」

今凄く、自分が嫌な人間。凄く醜かった。

あたしはベッドの上の携帯を充電器に繋ぎ、電源を入れる。

受信メールは20通近く、着信は10回程の履歴を表示する。

確認するのが怖かったメールを開こうとして指を伸ばすと、ディスプレイ

プレイに

伊緒クンの名前が浮かび上がる。

「もしもし。伊緒クン？」

『董さんっ！あぁやっとなってくれたあ。』

「ごめんね・・・ごめんね？」

『さっきの子は違うんだよ・・・そのコクられて断ったら思い出にしたいから』

一緒に帰ってって言われたんだ・・・だから、誤解しないで？」

それを聞いて尚更、あたしは伊緒クンを解き放たなきゃいけない気がした。

「誤解も何も・・・別にあたし達付き合ってる訳じゃないんだし、良いんだよ。」

あたしの事は気にしないで。」

『え？』

「じゃごめん、あたしこれからレポートやんなくちゃいけないから。」

その後の伊緒クンは何かを言ったかもしれないけど、あたしは聞きたくなかった。

ベッドカバーの上に落ちる水滴は、涙なんだろうけど、

これが悔しい涙なのか、悲しい涙なのか、自分でも良く解らなかった。

これで良かったって思うしかないじゃない。

彼もあたしもお互いに”スキ”だとは言っていない。

惹かれ合ったのは違いないのだけれど、急速過ぎて前が見えなくなつたんだと思う。

今までに出会った事のなかった人間に出逢い、心が逸り身体を重ねた事で

それを熱い想いだと錯覚したのかもしれない・・・彼は。

あたしは？

あたしはどうだろう。

屈託なく笑う彼の笑顔が可愛いと思った。

彼にせがまれれば何にでも応えたいと思った。

恋なのだろうか。母性なのではないだろうか。

SIDE 伊緒 - カオス -

どうしたら良かったんだろう。

董さんが受話口で言った”付き合ってる訳じゃない”。

これを受け入れるのに、脳が遅滞する。

あれから一週間が経過していた。

解んない。

その足で董さんのアパートのドアを叩けば良かったの？

次の日にでも図書館に行き、想いを告げれば良かったの？

「田口、この返却図書、棚に戻して。」

同じ図書委員の津田に言われ、俺は何冊かを手にし、図書室を歩き回る。

「この織戸悠つてお前がよく読んでるやつだろ？何か賞、取ったよな？母ちゃんが買ってた。」

それ、董さんから借りるって言ってた本だ。

「面白かったって？」

「んあ？何か深い、とか、解ってたか解ってたねーんだかの感想だったな。」

津田が鼻で笑った。

織戸悠の作品は、時折、彼の中だけで話が進行しているような描写がある。

勿論、それを理解させるだけの布石は、作品の何処かにあるのだが、全てに受け入れられる推理小説だとは思わない。

・・・俺の中だけで、恋の様な気持ちを押し進めていた？
董さんに想いも伝えず？

”キスしたい”と言った事や、彼女を抱きしめたいと言う感情は彼女の中に

布石として伝わっていただろうか。

・・・伝わっていなかった。

これは現実で、ストーリーではない。

言葉にしてぶつけなければ伝わらない事だってある。

董さん、貴女は知らないだろうけど、俺は貴女の名前をもっずつと前から知ってました。

3ヶ月前、初めて董さんに図書館で声を掛けられて、お茶をしたファミレス。

貴女が「安藤董」と名乗った時、俺の心臓が跳ねたのを貴女は知らないのでしょうか？

2年になって図書委員になった俺は、当番の日に図書室の端末をいじくっていた。

端末上に素通り出来ない程の”アンドウ スミレ”と言う名前。

”アンドウ スミレ”で検索を掛ければ、彼女がどんな本を何日間借りていたのか判ってしまう。

この時から董さんの名前は、俺の中にインプットされていた。

「そーいやお前、年上のセフレどうしたよ。」

「いつ俺が董さんをセフレだなんて言ったよ。」

「え？付き合ってたんの？5歳も年上と？」

あれから彼は此処には来ない。
酷い事を言ってしまった。大人げない一言だった。
もつと他に言い方があった気がする。

「よお安藤、お前仕事してんのかよ。」

「ああ浦部くん。お疲れ。」

「工業デザインの本、探してくれない？」

「あちらに検索用端末、有りますよ。」

「・・・横暴な職員だ。クレーム入れてやる。」

「あごメンナサイ。工業系は中2階のDかEに有ったと思う。」

「安藤、お前、高校生と付き合ってるって本当？」

今、それあたしに言うかな。

無言を貫こうと思った。

「しかも母校の。妹が安藤と高校生が歩いてんの見たって。」

あたしは返却図書を本日返却の棚に並べた。

「俺とやり直す気ない？」

「・・・。」

振り返ると浦部くんが直ぐ後ろに立っていた。

懐かしい香水の香りが鼻をくすぐった。

「調子の良い人ね。恵が駄目であたしに戻る気？」

浦部くんの横をすり抜けようとする、彼の手があたしの左手首を強く握った。

然程変わらない身長差の浦部くんの顔を睨みつけた。

「俺の気を引こうとしてガキと付き合ってたんでしょ？」

「伊緒くんはガキじゃないわよ、貴方と違って。」
あたしは浦部くんの手を振り払った。

入り口の自動ドアが開いて、伊緒くんが入館してきた。
何日振りの伊緒くんだろう。

あたしは何も無かった様に静かにカウンターに戻ろうとする。
浦部くんは執拗だった。

「ちゃんと話し合おうよ、夜何時もの店で待ってるから。」

止めて、伊緒くんに聞かれてしまう。

あたしは近くに居たスタッフの人に声を掛けた。
それから足早にスタッフルームへ立ち去ろうと試みる。

「安藤！」

浦部くんは又、あたしを引き留めにかかった。

「嫌がつてんの解ないんですか。」

伊緒くんの澄んだ声が、低く静かに館内に響いた。

こんなところで面倒は困る。あたしは浦部くんを外に連れ出して、何とか帰らせた。

館内に戻ろうと振り返ると、そこに伊緒くんが待ち構えていた。

「期末、どうだった？」

「そんな話する為に来たんじゃないよ。」

「何？」

寒さが身を縮ませる。あたしは両手で上腕部を擦った。

彼が目の前に立ち、自分のマフラーをあたしの首へと掛けた。

優しくしないで。

「本、借りるんですよ？中、入らない？」

あたしは目も合わせず、中に入る事を促す。

「此处で話したい。ちゃんと話したい。」

エピソード

二人は、図書館近くのファミレスで対峙していた。

「元彼？」

聞いてしまい直ぐに後悔の色を滲ませる伊緒。

今や何とも想ってない男性ひとの事を、伊緒に告げるのを躊躇する董。

「俺達、セフレ？」

董の心臓は警鐘を鳴らす。

（伊緒クンの口からそんな安易な関係だと言われなくなかった）

「伊緒くんはどう思うの？」

ズルイ言い方だと思った。自分が答える事を拒否した質問だ。

浦部くんが良くこういう物言いをした。

駆け引き。

伊緒が万が一にも、恋心を抱いていてくれるのだとしたら
きちんと確かにあるこの気持ちを伝えたい。

「そう思われても仕方ないと思うよ。」

伊緒は董から返された質問にこう答えた。

董の瞳は真っ直ぐに伊緒に向けられている。

目は口ほどに物を言うって言うんじゃないか？と伊緒は思う。

残念ながら董の心を読み取る事は出来ない。

もし董が、一緒の時間を過ごす事を許してくれるなら、年の差なんて関係無いと一蹴して、ありったけの気持ちで抱きしめたい。

（私の態度は、セックスを楽しむ年上の女だったのかしら）

（”キスがしたい”と性的アプローチをしたのがそもそも間違ってた）

董はアイステイーの中の氷が音を立てるのを聞いていた。

伊緒は机の上に置いた両手を組んで、乾いた唇を噛む。

「あたし、伊緒クンと一緒に居れて楽しかったな。織戸悠の話とか・・・。今の高校生の話とか。」

「・・・。」

（これは終焉なの董さん？）

董は頭を振った。

（駄目だ、私に浦部クンの真似は出来そうにない。みつともなくたって良いや）

「貴方があたしとのセックスが目的だったとしても、あたしにとってはかけがえのない時間だったよ？」

董は目を伏せた。

別れが近いと思うから、目頭が熱くなる、鼻腔に痛みが走る。泣く事だけはしたくないと両手を握りしめる董。

「・・・それは俺の台詞だよ。」

「え？」

「俺が董さんとエッチしたくて一緒に居たと思ってる?」

「そ・・そうじゃないの?」

「董さんこそ、年下相手に持て余してたんじゃないの?・・・あー・
・・良いや、そうでも良い。」

董さんが俺の事をガキ扱いしてたとしても良い。俺は、董さんが好きなんだよ。」

董は、右手で口元を隠す。

董の瞳が、涙で潤んでいるのが伊緒にも見て取れた。

それを確認して伊緒は頬を少し赤らめ、口角を上げる。

「董さんも俺の事、好きだって思っていていい?」

伊緒は、董の名前を知っていた事を先ず話そうと思う。

董は、図書館に通い詰める伊緒を何時も盗み見ていた事を話そうと思う。

エピローグ（後書き）

私が迷走してましたね。すみません（汗）
勢いで書いたのは良いが、纏まりも無く、書かんとする事がイマイ
チ・・・

本当にすみません・・・。愚作・・・。

長編、近々アップします。

そちら、力入れて今、執筆中です。。。頑張ります。
今回ゴメンナサイ。

*** 壬生 ***

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3335k/>

迷想 - メイソウ -

2010年10月15日18時17分発行